「ただ一方的な神のあわれみ」

ローマ９：６―１８

堀田修一　２４・１・２８

Ⅰ　神の深いご計画による選び

１.「しかし、神のことばは無効になったわけではありません。イスラエルから出た者がみな、イスラエルではないからです」：６。神のことば＝契約、約束、御計画は、決して無効になったりしない。「イスラエルから出た者（生まれながらの血肉のイスラエル人）がみな、イスラエル（神の選ばれた救いの民）ではないからです」：６。※この手紙でパウロは、「ユダヤ人」という名称を用いてきたが、９章から「イスラエル」という言い方に変わる。「イスラエル」とは、旧約聖書の族長時代からバビロン捕囚に至る神の民の名称。「ユダヤ人」とは、捕囚以降の名称。実質は同じ。「外見上（ユダヤ人の血が流れている）のユダヤ人がユダヤ人（神の救いの民）ではなく、また、外見上のからだの割礼（ただの儀式）が割礼（神の民のしるし）ではないからです。かえって人目に隠れたユダヤ人（神の前に自分の罪を認め主を信じた人）がユダヤ人（神の救いの民）であり、文字ではなく、御霊による心の割礼（主を信じる人の心を御霊が新しくされる新生）こそ割礼（神の民のしるし）だからです」（ローマ２：２８，２９）。

「アブラハムの子どもたち（血肉の子たち）がみな、アブラハムの子孫（神の約束の救いの子孫）だということではありません。むしろ、『イサク（神の約束によって生まれた子）にあって、あなたの子孫（救いの子孫）が起こされる』からです」：７。

「すなわち、肉（肉親）の子どもがそのまま神の子ども（神の約束の救いの子ども）なのではなく、むしろ、約束の子どもが子孫（神の救いの民の子孫）と認められるのです」：８

「約束のみことばはこうです。『わたしは来年の今ごろ来ます。そのとき、サラには男の子が生まれています』：９。アブラハムも年老いてその妻サラも年老いて子どもが与えられることは不可能だった時に、ただ神の約束によって定められていた「時」にイサクが生まれました。イサクは、自然な血肉によってではなく神の約束によって、全く奇跡的な、神の自由な恵みによって生まれました。

「それだけではありません。一人の人、すなわち私たちの父イサクによって身ごもったリベカの場合もそうだったのです」：１０。約束の子イサクの妻リベカは、エサウとヤコブを神から授かりました。

「その子どもたちがまだ生まれもせず、善も悪も行わないうちに、選びによる神のご計画が行いによるのではなく、召してくださる方によって進められるために、「兄（エサウ）が弟（ヤコブ）に仕える」と彼女（リベカ）に告げられました。『わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ』と書かれているとおりです」：１１－１３。

２. 正しい解釈と適用。このみことばは、誤解されやすい。「神がヤコブを愛し、エサウを憎んだ」というのは、人間の持つ感情的な愛と憎しみではない。神はヤコブもエサウも愛しておられたが、マタイ１章にある救い主の家系に選ばれるのは、ヤコブに計画しておられたということ。エサウは滅んだということではない。エサウに憎まれるようなことをしたヤコブも神に心砕かれ謙遜になりエサウと時満ちて和解しました（創世記３３：３，４）。新約でも主は言われた「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まな

い者は、私の弟子になることができません」（ルカ１４：２６）。聖書は、まず神に愛され、神の愛で父、母、妻、子、兄弟姉妹、健全に自分自身を愛する事を教えます。ですからここでの「憎む」という意味は、まず私たちを命がけで愛してくださった主への私たちの愛は、非常に大きな愛であるべきであり、主を愛することと人を愛することがぶつかる時には、人を憎んでいるかのように思われても主を第一とし主を愛する必要がある時があるという意味。証し：私、宣教師、牧師、信徒。※ここで私たちが心に留めるべき真理は、神の選びの恵みは、私たちがまだ生まれてもおらず、善も悪も行わないうちに神の主権的なご計画によるという恵みです。「すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方にあって私たちを（救いに）選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされました。神は、みこころの良しとするところにしたがって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました」（エペソ１：４、５）。それ故に主を信じることが出来たのです！何という人知を遥かに越えた愛でしょう！私もあの人も選ばれていなかったらどうしようと心配する必要はない。すべての人は神の救いに招かれており、主を信じさせていただいたときに、神に選ばれていたおかげで主を信じることが出来たと分かるのです。※証し。

Ⅱ　神の深いあわれみ

１.「それでは、どのように言うべきでしょうか。神に不正があるのでしょうか。決してそんなことはありません」：１４。ヤコブとエサウが生まれもせず、行いにもよらず、ヤコブを選ばれるのは、神の不正、不公平ではないかという疑問です。それは人間の限られた知識で考えるなら当然出て来る疑問です。それに対して「決してそんなことはありません」ときっぱりと答えられます。神は不正、不公平ではないかという疑問は、あくまで人間の側からの人間的な疑問であり、神の主権性と絶対性に対立する考え方です。「神はモーセに言われました。わたしはあわれもうと思う者をあわれみ、いつくしもうと思う者をいつくしむ」：１５。神は全く自由で、だれにも束縛されることなく、あわれみたいと思う者をあわれまれ、いつくしもうと思う者をいつくむことができる主権と絶対性をお持ちのすべての創造者。それは、私たち人間の正義とか倫理を超越した神の主権的な自由です。神が絶対者であるゆえに当然のことです。罪人の私たちは、神のあわれみといつくしみを受ける資格はないのです。しかし、神は、一方的に私たちをあわれみ、いつくしみ、私たちを救い、永遠の愛で愛し続けておられる驚くべき恵みを感謝しましょう！証し。

２.「ですから、これ（救いの選び）は人の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです」：１６。このように救いの選びが神の絶対性と主権性によるのであれば、それが人間の願いや努力によらないのは当然のことです。人間の願いや努力が、神のあわれみを受ける絶対の条件ではありません。神のあわれみは、あくまでも神の意志によります。人の努力による救いなら、人の誇りが出ます。

３.「聖書はファラオにこう言っています。『このことのために、わたしはあなたを立てておいた。わたしの力をあなたに示すため、そうして、わたしの名を全地に知らしめるためである』：１７。ファラオは、イスラエルのエジプト脱出に激しく反対したエジプトの王。神は、ファラオを立てておられた。神の民イスラエルのエジプト脱出に反対する指導者として。神の力をファラオに示すため、また、主の名（ヤハウェ）の名、栄光、偉大さを全地に知らしめるため。偉大な神は、ファラオの心を支配されただけではなく、すべての出来事を支配しておられることを示

された。私たちに起こる出来事も世界も支配しておられる。

４．まとめ、結論。「ですから、神は人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままに頑なにされるのです」：１８。神の偉大な主権と支配。ここで注意したいのは、人間の心が頑ななのは神のせいだと責任転嫁をしてはならないという真理。神の支配は、人間をロボットのように扱われる事ではない。支配者の神は人間に自由意思を与え、私たちが頑なな心、罪を悔い改め、救われることを望んでおられる。人々に真の信仰を強制はできない。しかし、福音を届け、救いは神に委ね祈り続けることが出来る。「忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる」Ⅱペテロ３：９。「神はすべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます」Ⅰテモテ２：４。私たちへの神の一方的なあわれみの救いを感謝し人々の救いを祈り賛美しましょう。教会福音讃美歌３０４番